死を覚悟して、なお夢を持ち続け得た新島襄

三宅 威仁	神学部准教授
奨励者紹介〔みやけ・たけひと〕	〔研究テーマ〕 宗教社会学。近現代の西洋における宗教哲学

神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。
（ヨハネによる福音書　三章一六-一七節）

「中年のおじさん」になって

私は十三年ほど前に神学部の教員になりまして、それ以来、平均して毎年一回はこのチャペル・アワーでお話をする機会に恵まれてまいりました。
私が同志社に入社したてのころ、まだ三十代半ばでしたが、そのころはお話しするのが楽しかったのですが、正直に申しますと、このところこのチャペル・アワーで奨励（メッセージ）を担当するのがだんだんと苦痛になってまいりました。
と申しますのは、このチャペル・アワーでは（本日はご年配の方々もお見えになっていらっしゃいますが）、主に学生の皆さんを対象にお話しすることになっています。私が同志社に入社したころは、私もまだ若かったので、若い学生の皆さんにお話しするのは、同じ立場に立って話すことができるという点で、たやすかったわけです。ところが、いつの間にか私もすっかり中年のおじさんになってしまいました。ふと気がつくと、この地上で私に残されている時間は、これまでに生きてきた時間よりも短い、ということになってしまいました。この年齢に達すると、毎日の生活のなかで抱えている問題・日々の生活のなかで感じている疑問が、若いころとはかなり変わってきておりまして、つまり、若い人びとの問題意識・若い人びとの立場とはかなりの開きがありまして、そういう意味で若い人びとに語り掛けるのに困難を覚えるようになったわけです。

人生の「午前」と「午後」

分析心理学の創始者であるカール・グスターフ・ユングは、一日のうちに午前と午後があるように、人間の一生にも午前と午後があると述べています。人生の前半と後半と言った方が分かりやすいかもしれません。そしてユングは、人生の午前と午後とでは、人間が果たさなければならない課題・やり遂げなければならない任務が異なる、と語っています。
人生の午前、人生の前半においては、人間は一人ひとり自分の自我を拡大していくことが課題になります。この個人個人の自我というものを、ここで私は「個我」と呼びたいと思いますが、この個我を押し広げて大きくするというのはどういうことでしょうか。それはつまり、知識や技術や収入や身分や地位や名声といったものをどんどん身につけていく。また、多くの人びとと知り合いになって人間関係を豊かにしていく。そうすることによって、自我というものをしっかり確立する、ということでしょう。人間はこの世に生まれ落ちたときには、まだ自我というものがしっかり確立していません。赤ちゃんは「オギャー、オギャー」と泣くだけで、自分の思いを言葉で表現することもできないのですが、それが成長するにつれて、小学校・中学校・高校・大学と学校へ行き、知識を学んだり技術を身に付けたり資格を取ったりします。教育を受けた後は社会に出て仕事に就き、収入を得、社会的な役割や身分や地位や名声を手に入れます。その間、人間関係のネットワークも複雑になり、友人の数も増え、さらには結婚して配偶者や子どもができ、自分の家族を形作ることになります。
そんなふうに個人の我というものをどんどん大きくしていくことが、人生の前半の課題、若者の課題と言えるでしょう。
それに対して、人生の午後に差し掛かった人間は、午前とは全く逆に、それまでに蓄えてきたものを上手に手放していくことが課題になります。もちろん、年齢的に人生の後半に突入しても、前半と同じように知識や技術や収入や身分や地位や名声をどんどん増やしていくことに生きがいを感じている人もたくさんいます。ところが、そんなことに最早何の意味も見出せなくなる人も大勢いるのです。
その理由をごく簡単に申しますと、結局、人生の後半に入ると、人間は自分がやがて死ぬことを意識せざるを得なくなるからです。もちろん、若い人びとも多かれ少なかれ死を意識しているでしょうが、そして私も若いときにも死について考えましたが、若いときに考える死には、やはりまだ観念的なところがあります。まだ遠い未来のことといったところがあります。また、若い人びとが死について思い悩むときには、実は生について思い悩んでいることが多いのです。つまり、若い人びとが「自分もいずれは死ぬのだ」などと考えているときには、実は「自分はこれからどう生きていけばよいのか。どんな人生が生きるに値するのか」と考えているわけです。
ところが、人生の後半に差し掛かると、死が否応なく事実として迫ってきます。私もこのところ、後、何年生きられるだろうかなどと考えたりします。
そんなふうに人生の午後になると、自分の死というものが視界に入ってきます。すると、いずれにしても死んでしまうのなら、今さら知識や技術や収入や身分や地位や名声を身につけて何になるのか、といった思いに捕らわれるわけです。もちろん、先ほども申しましたように、中年や老年に達しても、そんなふうに考えない人もたくさんいます。
ユングは心理療法士、つまりカウンセラーとして、心の病に罹っている人びとの治療に当たっていたのですが、実に自分の患者の三分の二は人生の午後に差し掛かった人びとだ、と述べています。これらの人びとは人生の前半においては立派に生きてきました。知識や技術や収入や身分や地位や名声を築き上げてきました。ところが、人生の後半に到達して、もはやそうした生き方に何の意味も見出せなくなったのです。若いころの生き方、つまり個人の我を拡大するだけの生き方しか知らない彼らは、どうやって自分の死に向かって歩んでいったらよいかが分からず、それで立ち往生しているのだ、とユングは語っています（「心理療法の目標」などを参照のこと。C・G・ユング著、林道義編訳『心理療法論』、一九八九年、みすず書房、所載）。

人生の「午後」に持つ「夢」とは

当然のことながら、人生の午前に生きている人間の持つ「夢」と、午後に生きている人間の持つ「夢」とでは異なる、と言えましょう。
最近の若い人は世の中の現実がよく見えているのか、あるいは人間がこぢんまりし過ぎているのか、実現できないような大それたことは初めから高望みしない、あまり大きな夢を抱く青少年が少なくなった、などと言われています。しかし、それでも若い人に「あなたの夢は何ですか」と尋ねると、スポーツ選手になりたいとか、歌手になりたいとか、芸術家になりたいとか、外国で仕事をしたいとか、とにかく有名になりたいとか、そういった答えを返してくれるものと思います。そうした夢は、まさに個人個人の自我を拡大することです。
しかし、人生の後半に到達した人間は同じような夢を持つことはできません。それは、先ほどから申しているように、死がまなざしに入ってくるからです。
「夢」とはまた「人生の目標」と言い換えてもよいかと思います。人間が人生の最終目標を個我の拡大にのみ見出している場合、死は絶望でしかないでしょう。どれだけ個人の我というものを大きくしても、最後は死によって一挙に無に帰してしまうのですから。だとすれば、人生の午後にいる人間はどのような目標を持って生きていけばよいのでしょうか。このところ、私はよく「人生の後半に突入した人間の持ち得る夢とは何か」と自問します。
そうした問題意識を特に強く感じるようになったのは、私事で恐縮ですが、三年前、父親を亡くしてからです。私の父親は脳梗塞で倒れ、病院のベッドに寝たきりになりまして、私が病院に見舞いに行くたびに痩せ衰えていきました。流動食を、初めはチューブで鼻から入れていたのですが、遂に脇腹に穴を開けて胃に直接注入するというところまでいきまして、それでも最後は干乾びたようになってしまい、亡くなりました。そんな父親の姿を見て、私は、人間はこんな状態になってもなお夢を持つことができるのだろうかと問わざるを得ませんでした。しかも、父親のそんな姿は、他人事ではなく、何十年か後に、あるいは何年か後に私自身の辿る道でもあります。私は自分がこのように病院のベッドに寝たきりになっても、なお夢や希望といったものを持ち続けることができるのだろうか、と自問せずにはいられませんでした。
そのとき、私の脳裏に浮かんだのは、病に倒れながらも、命が尽きる最後の瞬間まで、二〇〇年先、三〇〇年先を見据えるほどの遠大なヴィジョンを持ち続け得た、私たちの校祖・新島襄の生き方でした。
（ちなみに、新島襄のことを私はもちろん「新島先生」とお呼びしたいのですが、ご本人が自分のことを決して「先生」と呼ぶなかれと命じておられますし、すでに歴史的人物でもありますので、ここでは敬称なしで「新島襄」と呼びます。）

新島襄の「一回目の遺書」とその後の時間

新島襄はわずか四十六歳と十一ヵ月で亡くなりました。神奈川県・大磯にある百足（むかで）屋という旅館で療養していたのですが、遂に回復せず、一八九〇年一月二十三日に息を引き取りました。
亡くなる直前に何通かの遺書を書き残しています。「書き残した」と言うよりも、枕元にいた徳富蘇峰らに口述筆記させたと言った方が正確です。同志社全体に対して遺された十ヵ条の遺言は特に有名で、皆さんもお聞きになったことがあるかもしれません。そんな病床にあっても、新島はなお絶望に陥ることなく二〇〇年先、三〇〇年先を夢見ることができました。自分の死を超えて、その遥か先に希望を寄せ続けるという力を、新島はどこから得たのでしょうか。
実は、その臨終の五年半ほど前、四十一歳のときに、新島は一度、自分の死期の近いことを覚悟して、遺書を書いています。「一回目の遺書」と呼んでよいでしょう。そのときのいきさつを少しお話ししたいと思います。
新島は一八七四年、三十一歳のとき、十年近いアメリカ留学を終え、日本に帰国しました。帰国後は、群馬県・安中に住んでいた家族の許でひと月ほど過ごした後、関西に来まして、キリスト教伝道とキリスト教主義学校の設立に全力を傾けました。帰国の翌年、一八七五年十一月二十九日に寺町丸太町上る、現在、新島会館の建っている場所で同志社英学校を開設しました。新島は、この同志社英学校を発展させ、さらには大学に昇格させるためのさまざまな運動に奔走し、同時に全国各地に伝道旅行に出掛け、キリストの福音を宣べ伝えました。実は新島は若いころからそんなに体が丈夫ではなく、病気がちだったのですが、そうした仕事の激務がたたってすっかり健康を害してしまいまして、周囲の人びとの強い勧めもあ

り、保養のため、ヨーロッパとアメリカに旅行に出掛けることになりました。それは一八八四年、新島が四十一歳のときのことです。もっとも、仕事のことが頭から離れない新島は、旅行中も各地で講演や募金活動などに携わっていまして、本当に保養になったのかどうかは疑問です。
ヨーロッパへの旅行と言っても、当時のことですから、もちろん船で行くわけです。インド洋から紅海に入り―アラビア半島とアフリカ大陸に挟まれた紅海ですが―紅海を北上し、エジプトのスエズ運河を通って地中海に入り、地中海を渡り、まずイタリアを訪れました。イタリアで暫く滞在した後、アルプスを越えてスイスに入ろうとしたのですが、アルプスのサン・ゴダール峠に向かって散歩しているとき、呼吸困難に陥りました。そのときのことを新島は「心臓に何か故障が起きたに違いない」と書き残しています。
辛うじて峠のホテルに辿り着きましたが、自分は間もなく死ぬと考え、「私が死んだ後はこれこれこうしてください」といったことを遺書に認（したた）めました。それは一八八四年八月五日のことです。遺書の日付は八月六日になっています。お手許にお配りしたプリントの小さい方、Ａ４判の紙に書かれているのが、まさにその遺言です。原文は英語ですが、分かりやすい日本語に翻訳してあります。ところで、まさに今朝のことなのですが、私はキリスト教文化センターから二〇〇六年春学期の同志社スピリット・ウィークの講演集を頂戴しました。そのなかで宮庄哲夫先生がこの一回目の遺書について詳しく分析されていますので、ぜひそれをお読みいただきたいと思います。それをお読みになりますと、お分かりのように、亡くなった後、誰それに連絡してくださいとか、遺体はどう処理してくださいといった実務的なことが書かれています。新島はすでにこのときに死を覚悟していたのです。
しかし、そのときは幸い一命を取り留め、スイスのルツェルンへ行き、そこで少し落ち着いたので、遺書に関するメモを書くことにしました。つまり、遺言を残そうと思ったいきさつ、その前後の状況や、そのときの気持ちなどを覚書に認めています。それは八月九日、遺書を書いてから三日後のことです。そこに次のように書き記されています。引用します。
「あれ（サン・ゴダール峠で呼吸困難に陥った出来事―引用者注）からいよいよ私の人生は自分のためのものではない、と感じている。生きるにせよ死ぬにせよ、私はキリストのために生き、キリストのために死ななければならない」
（『現代語で読む新島襄』、二〇〇〇年、丸善、一七四ページ）

　このように述べています。
新島は一八六四年、二十一歳のとき、先進国の文物を学びたいという志を抱き、国禁を犯してアメリカへ渡りました。新島はすでにそのころから自分の富や名誉を高めることには何の興味も抱いていませんでした。命懸けで渡米したのは自分の立身出世のためではなく、幕藩体制の崩壊を目の当たりにし、欧米の知識を吸収することによって何とか日本の国を新しく作り直したいという思いに駆られたからでした。アメリカで、その進んだ文化と社会がキリスト教に基礎付けられているということを実感した新島は、日本に帰った暁にはキリスト教主義学校の設立とキリスト教伝道に献身しようと決意しました。新島はすでにそのころからキリストに身を捧げていたのですが、サン・ゴダール峠で呼吸困難に陥って死をはっきりと覚悟して以来、さらに明確に自分の命をキリストに捧げる決意をしたのです。
一度は死を覚悟した新島にとって、それ以後の時間はまさに神から与えられた時間、神によって生かされている時間として感ぜられたことでしょう。サッカーでロスタイムというのがありますが、まさに死を覚悟して以後の時間はロスタイムです。そして、それは自分が好き勝手に使ってよい時間ではなく、神に捧げ返さなければならない時間と思われたはずです。同志社を立派な学校へと作り上げることと、日本にキリストの福音を宣べ伝えることという二つの活動を、新島はすべてキリストのために行っていたのです。

「賜物」としての人生

一般に、人間が人生の目標を個人の自我の拡大にのみ置いている場合、個人の終焉、つまり死は絶望でしかありません。自分にとって最も価値のある個我が、死とともに消え去ってしまうのですから。しかし、個人を遥かに超えた大いなるもの・個我を超越したものから個人の命が与えられていることに気づくとき、死によって虚無と化すかに思われた限りある人生は「賜物」としての輝きを取り戻します。人生の一日一日、いや一瞬一瞬が、超越者からの「贈り物」となるわけです。
そのように、人間を超えた大いなるものによって生かされていることに気づき、その個人を超越したものに対して命を捧げ返すこと―そこに人生の最終目標を見出した者にとっては、もはや個人の死などどうでもよくなります。自分が超越者の計画のなかに組み込まれ、その実現のために努力し、何ほどかの貢献をしたと考えることのできる者は、たとえ死の床に横たわっても、その計画の実現される何百年か先を夢見ることができるのです。

全体主義の危険性

しかし、そんな考えには、個人が全体主義・集団本位主義に埋没しかねない危険性も潜んでいます。つまり、全体的なものが個々の人間を犠牲にしてまで富み栄える。集団のために個々の人間は滅私奉公を強要される。全体がすべてで個々人は無である。全体が個々人を食い尽くす―そうした危険性です。
具体的には、たとえば戦前・戦中の日本における軍国主義を考えていただければよいでしょう。大日本帝国のために、天皇陛下のために、個々人は命を捨てることを奨励されました。あるいは、現在も世界各地で戦争やテロリズムが頻発していますが、戦争やテロを無理やり正当化し、そうした破壊行為に人びとを駆り立てるために、神の名前が引き合いに出されることがあります。これは神の正義を実現するための戦争なのだからイラクへ行って戦えとか、これは神の敵を滅ぼすためのテロ行為なのだから自爆せよ、といった具合です。キリスト教がそうした目的のために利用されることもあります。
さきほど人間は、個人を超えた大いなるものに身を捧げることによって、死の虚無作用から救われると申しましたが、それはこうした全体主義・集団本位主義に巻き込まれることにならないのでしょうか。
新島の場合はどうだったのでしょうか。新島も、個人を犠牲にしてまで全体が富み栄えるという集団本位主義に陥ってはいなかったでしょうか。

ヨハネ伝三章一六節のもとで

新島は同志社や教会のような組織のために生き、また日本という国家のために生きたのですが、さきほどの一回目の遺書に関する覚書にも書かれていましたように、彼が自分の命を捧げた最終目標はキリストでありました。
キリストとはどういう方でしょうか。
新島は若いころ、聖書を読んでいて、ヨハネによる福音書第三章一六節「神はその独り子をお与えになったほどに、世を愛された」という聖句に出会い、たいへん感動しました。新島はこの聖句を「聖書の中の太陽」と呼び、最も愛しました。
聖書によると、人間は罪を犯したため、神から切り離されてこの地上を彷徨っています。そうした人間を再び神の許に連れ戻し、神と結び付けるために、神自らがその独り子を人間の許に遣わされた。それがイエス・キリストだというのです。このキリストは、この世の矛盾を一身に背負って十字架に付けられた。そうすることによって、人間の罪を自らが身代わりとなって引き受けた。そして神と人間が和解するための道筋を付けてくださった、と聖書は証言しています。
このキリストの生誕、生涯、死、復活に神の愛が表われている、ということを新島は実感していました。神は人間を呼び戻すために、その独り子をこの世に送り、その独り子は自らの命を擲（なげう）ってまで神のメッセージを伝えてくださった―そこまでしてくださった神の愛を新島は実感していました。
つまり、新島が命を捧げた神は、人間からの犠牲を一方的に要求するような神ではなく、神の側からその独り子を犠牲にしてまで、人間を愛し、人間を支え、人間を生かしめるような神でありました。
新島は生涯を同志社に捧げました。その点、彼は同志社という組織のために生きたと言えますが、同志社は、「社員」に滅私奉公を強要する組織ではなく、自治自立の人間、即ち自ら立ち、自らを治める個々人によって自発的に結成され、またそうした自治自立の人間を養成すべき教育機関でした。つまり、個々人は同志社という組織を自由に結成し、またこの組織は個々人を支え、生かしめるのです。要するに、新島が思い描いていたのは、個々人と組織が支え合う関係でした。さらに、個々人も同志社も、そこで止まってしまうのではなく、と申しますか、それで自己完結するのではなく、新しい日本に尽くすべき存在でした。その点、新島は日本という国家のために生きたと言えますが、その日本は、臣民、つまり天皇によって支配され、天皇に服従することを義務付けられた人びとを国家主義のなかに搦め取る皇国ではなく、真正の自由を愛し、良心を手腕に運用する個々人の構成すべき国家でした。つまり、個々人は日本という国家を自由に結成し、またこの国家は個々人を支え、生かしめるのです。もちろん、新島は天皇制そのものに反対したわけではありませんが、残念ながら、新島の期待とは裏腹に、日本はその後、軍国主義への道を進んで行きました。しかし、新島がもともと思い描いていたのは、国民と国家の支え合う関係でした。けれども、国家が究極目的なのでもなく、個々人も、同志社という組織も、日本という国家も、すべては神の御手のなかに存在しているのです。しかも、その神は、人命を生け贄として要求する神（戦争やテロを正当化するために引き合いに出される神）ではなく、「その独り子をお与えになったほどに、世を愛された」神でした。こうして新島は、個々人と同志社という組織が支え合い、個々人と日本という国家が支え合い、そして個々人と組織と国家が、すべて神によって相対化されながらも永遠の命を与えられるという関係を夢見、その実現のために一命を投げ出したのであり、まさにそれゆえに、死の床に横たわったときにもなお理想を持ち続け得たのでした。
かつて新島は勝海舟と対談したとき、勝から「君の理想とする教育を日本全国に普及するには何年掛かるか」と問われ、即座に「おおよそ二〇〇年の積もり」（一説によれば三〇〇年）と答えました。そのころからすでに新島は自分の存命中に同志社の完成を見ることはないと自覚し、数百年先を見詰めていました。その思いは彼が死の床に横たわっても、変わることはありませんでした。私たちも彼の雄大なヴィジョンから学びたいと思います。

二〇〇七年十一月七日　同志社スピリット・ウィーク
水曜チャペル・アワー「奨励」記録